

印象記

夏目漱石

中村武羅夫

印象記

夏目漱石

一

近ごろ、内田魯庵氏から「思ひ出す人々」一本を贈られて、愛読している。旧版「きのふけふ」のときにも愛読したが、こういう人に関した思い出話とか、印象風のもの、何度読んでも面白い。殊に夏向きの肩の凝らない読みものとしては相応しい。——そこで、私もこれまで会って来た重なる文学者の、思い出話ともつかなければ、印象ともつかず、勿論人物評でもなし、まず文学者についての雑話とでもいうようなものを、夏の文芸欄

の軽い読みものとして書いて見よう。

職業の関係で——もう廿年近くも、雑誌編集のような仕事にたずさわっているので、大抵な文学者には会って来た。尾崎紅葉とか、山田美妙とか樋口一葉とか、ああいう時代の人は知らない。が、それ以後の人々なら、大抵知っているといっている。ただ、長谷川二葉亭だけは知らない。会おうと思えば会える機会があつたものを、会わないで来たことを、今では残念な気がして居る。紅葉とか美妙とかいうひとは、そうでもないが、二葉亭だけには、一度でも会っておけばよかつたと思う。会わな

いで惜しいことをしたという気がするのは、二葉亭一人だ。彼れの残した仕事よりも、人物の方がもつと面白かったろうという気がするからだ。

池辺三山、山路愛山、ああいう人々の印象も、はつきり残っている。夏目漱石、森鷗外、国木田独歩、上田敏、島村抱月、岩野泡鳴、有島武郎、横山源之助、大杉栄、大町桂月——私の会って来た文学者も、かぞえて見ると、もう十本の指を折ってなお余るほど、すでに故人となつてしまった。この中で、たった一度しか会ったことのないのは、池辺三山と上田敏の二人だけで、その他の人々

には、たびたび会って居る。

夏目漱石は家が近所だったので、一月に一度や、二月に一度は用事以外でも遊びに行つた。木曜日が面会日だったので、大抵その日の午後出かけて、夕方ごろまで、いろんな話しをした。門下の人々は、みな夜集まるので、私は、漱石の客間で、門下の人々に会つたことは一度もないが、その他の人々には、ちよいちよい面をあわした。中村是公氏や三宅やす子氏や、その当時の文部次官をしていた福原何とかという人達を、最初に見たのは、漱石の客間であつた。

人に会っても、敬愛の感じを以て、心から頭を下げるような人物というものは、そんなに多くはない。多くはないどころか、殆どないといつていい。殊に私なんか、性質が偏屈なせいか、相手の美点よりも、欠点ばかりが目についてこまるが、漱石だけには、心から頭が下がる気がした。ああいうのは、人間の徳とでもいうのである。極く、平々凡々に見えながら、それで、どこか底光りがしているのである。

人物の品位——奥深さというようなものは、客間などで相対している時よりも、たとえば集会の席などのよう

な、大勢集まった中に置いて見ると、一番、はっきりと分かるものだ。鈴木三重吉氏の夫人の告別式が、銀座教会にあった時、私も参列した。ちよつとつむじ曲りの三重吉氏のことであるから、普通の告別式とは大分毛色の変ったもので、牧師なんかまねかず、小宮豊隆氏が司会者になって、安倍能成氏が、聖書の朗読をしたりなんかして、焼香の代わりに、会葬者全部が、かわるがわる立って、一輪ずつの白百合の花を、黒布で覆うた寝棺の上に捧げるのであった。漱石も自席から立って、やっぱり白百合の花を、夫人の寝棺の上に捧げたのであったが、

私はその時の漱石の紋付羽織袴の姿と表情とを、わすれることが出来ない。丈の高い方ではなかったが、堂々たる風姿が場を圧して、鋭い双の眼は鷲の如く、ぴんとはね上がった口髭の下の唇辺に、何とも形容の出来ない微笑をふくんでいるのであった。

二

もう少し夏目漱石のことを――。

漱石のその時の微笑は、「三重吉の奴、キザな真似をしやがるな」とでもいう苦々しさと、若くして逝いた

三重吉氏の夫人に対する敬虔な哀悼の感じとを、ごつちやにして現したようなものだった。少くも私には、漱石のその時の微苦笑が、そんな風な心持ちを現しているように感じられたのだった。

それでも漱石は、ゆっくりした、重々しい足どりで棺前まで進むと、皆ながするとおなじように、白百合の花を一枝手にして、黒布で蔽うた棺に向かって、ちよつと頭を下げた。そしてその時は、唇辺から微苦笑の影が消え失せて、ひどく厳肅な、苦い表情に満たされていた：
：私の目には、漱石の死後、今でも、時々、その時の漱

石の姿と表情とが、髻髻として眼に浮かぶのである。

私が、湯の中で小便して、漱石に顔をあらわせて、大いに漱石をおこらしたというようなゴシップが、つたえられたことがある。が、これはまちがいである。私だつて、まさか自分の小便で、人に顔をあらわせるような、そんな人の悪いまねをする筈はない。

それは多分、つぎのような話しが誤伝されたものだと思う。

その当時、漱石の家に、湯殿があつたかどうかを、私は知らない。漱石の家は、やっぱり現在の、早稲田南町

だったが、今のような堂々たる邸宅ではなく、確に家賃は四十五円とかと漱石自身の口から聞いたことがあると思うが、借家だった。勿論、湯殿はあったことだろう。が、直き前の銭湯に、よく出掛けて来た。大抵、一番空すいた十時ごろから二時ごろまでの間だった。私も、よくその銭湯に行ったので、時々湯の中で出逢うことがあつて、「やあ」と、裸で挨拶するのであつた。

「先生、湯に入ると、自然に小便が出たくありませんか？」

或時、私が、風呂の中で聞いた。

「湯の中でか？」

漱石は、やっぱり湯に浸かりながら、斯う反問した。

「そうです。」

「ないね。——君はそんなことがあるか？」

「じゃ、僕だけですかね。僕は湯に入ると、自然に小便がしたくなるんです。」

「汚いね。」漱石は口尻をしかめて苦笑したが、急に立ち上がって、「そんなことをいって、君は今、したんじやないか？」と詰問した。

「そんなことがあるもんですか。」私は笑った。

「どうだか、怪しいものだ。君が小便したんだと、僕は君の小便で顔をあらったことになる。汚いね。」

漱石は、もう一度顔をしかめて、苦笑した。

そんなことが、私が、自分の小便で、漱石に顔をあらわせたなどというゴシップに、誤りつたえられたのである。お陰で私は、その後時々、徳田秋声氏と一緒に旅行などして、ふるには入ったり、温泉に浸ったりする度に、「君、小便をしはしまいね。」などと、念を押されるのである。「僕と一緒にするには、そいつだけは、一つ勘弁してくれたまえ。」と秋声氏は、私をからかうので

ある。

一度、漱石をひどく怒らしたことがある。それは私が、彼れの印象を書いて、床の間の置き物のような、時代離れのした骨董品の感じだといったのに、憤慨したのである。

「時代離れのした骨董品に、談話をさせて、雑誌に載せてもつまらないだろう。僕は御免被る。」

その後、私が談話を求めに行った時、漱石は斯ういつて謝絶した。

「談話筆記は、僕の職業で、僕はそれで生活してるんで

す。少しばかり先生の悪口を書いて原稿料にしましたが、そのために談話をことわられると、僕は食っていけません。」

私は、やりかえした。そして二三の議論を上下した後、漱石の気持ちは打ちとけて、彼れはやっぱり私のために談話してくれた。

日本文学電子図書館

文壇隨筆

著者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮社

大正14年11月10日 印刷

大正14年11月15日 発行

日本文学電子図書館